競技に合わせリハビリ

医人伝

主体会病院（三重県四日市市） 副院長・整形外科部長

川村 豪伸（かわむら ごうしん）さん（52）

リハビリを生かした治療に取り組む川村さん

けがからの回復を目指すリハビリテーションに力を入れる。「再発することなく、再び病院に来ることがないようにしたい」。ただ単に体が動くように戻すだけでなく、けがの予防につながる正しい体の使い方なども取り入れたリハビリを心がけている。

手術をせずに治療を進める「保存療法」でも積極的にリハビリを導入。CTやMRI、エックス線などを駆使してけがの原因を診断し、理学療法士と連携してプログラムを構築。体の動きがけがを長引かせる理由になることも多く、「リハビリで原因が見つかることもある」と話す。

三重県四日市市出身。父親と兄も医者という「医療一家」で生まれ育った。小学生の頃から野球を続け、スポーツに携わる仕事をしたいと整形外科医を志した。

1998年に愛知県豊明市の藤田保健衛生大（現・藤田医科大）を卒業。医師として2年目の頃、三重県の桑名市民病院（現・桑名市総合医療センター）でリハビリに力を入れる整形外科医や理学療法士、義肢装具士に出会った。リハビリを通じて症状が良くなる患者を目の当たりにし「本当にこれで変わるんだ」と重要性を再認識した。

2010年に主体会病院へ着任すると、「手術以外の人のリハビリもしっかりと取り組みたい」と、理学療法士らとともにスポーツ専門の整形外科チームを発足。実際の競技の動きに即した「アスレチックリハビリテーション」を取り入れ、走り方や投げ方などの正しい動きを指導し、けがからの復帰と再発防止に力点を置いた治療を進めた。

昨年4月には延べ1146平方㍍の広大なリハビリセンターを開設。天井高7㍍の運動ができるスペースがあり、長さ15㍍の陸上レーンやバスケットボールゴール、防球ネットなどを備えた。実効性の高い治療が評判を呼び、現在では月2600人が受診する。

特に多いのは部活動に取り組む中高生。「選手にとってはいつからできるのか、どれだけ休めばいいのかが大きな問題」として、一人一人に合わせた治療方針を立てる。

「体が思うように動かせるようになり、パフォーマンスが上がれば」

（秋田耕平）